

■ a 1846—1866年のイギリス

S.677-678 資本主義的蓄積の典型的実例としてのイギリス

- ・「近代社会のどの時期を見ても、最近の20年間ほど資本主義的蓄積の研究に好都合な時期はない。」(677)
- ・「すべての国のうちで典型的な実例を提供しているのはやはりイギリスである。」(677-678)
  - 「イギリスは世界市場で第一位を維持しているから」
  - 「資本主義的生産様式が十分に発展しているのはただここだけだから」
  - 「1846年以来の自由貿易の至福千年王国の実現が俗流経済学の最後の退路を遮断したから」

S.678-680 人口、富、資本の集積・集中、各種産業について

- ・19c前半は人口の絶対的増加が大きいにもかかわらず、増加率は減少。(678)
- ・「富の増加」の「もっとも確かな手がかり」は、「所得税を課される利潤や地代などの変動である。」(678)
- ・1853-1864年のイギリスの富の増加は、課税される利潤でみて50%以上増加、賃貸料の増加は38%であったが、同じ期間の人口の増加は12%だった。(678)
- ・「資本の蓄積は同時に資本の集積と集中とを伴った。」(679)
  - 小借地農場は減少し、より大きい借地農場に合併された。(679)
- ・石炭や銑鉄の生産量、鉄道の敷設、総輸出入額は増加。(680)

S.680-683 労働者階級の貧困

- ・グラッドストーン——「富者はますます豊かになったが、貧者もまた貧しさを少なくしてきた。貧困の極点が軽減されたとはあえて言わないが。」(681)
- ・「有産階級のために「人を酔わすような、富や力の増加」を生産したのに比例して「貧しさを少なくした」だけだとすれば、労働者階級は相対的には相変わらず貧乏なのである。」(681)
  - 「貧困の極点が軽減されなかったとすれば、それは増大したのである。富裕の極点は増大したのだから」(681)
- ・「小売商人への労働者の従属の増大」(682)
- ・蓄積の諸法則の十分な解明のためには、作業場の外における労働者の食いや住まいの状態を考察しなければならない。(683)
- ・公認の受救貧民の人数の増加と増加率の増大(683)
- ・貧民統計を分析するさいには、①「貧民群の干満運動は産業循環の周期的な局面変換を反映する」という点、②「資本の蓄積とともに階級闘争が発展し、したがってまた労働者の自覚が発展するにつれて、受救貧民の現実の範囲について公式の統計はますます欺瞞的になる」という点を重視しなければならない。(683)

貧困の極点がむしろ少しい。

■ b イギリスの工業労働者階級の低賃金層

S.684-687 低賃金層の栄養不足

- ・ 1863年のドクター・スミスの調査では、窒素の供給がそれ以下では飢餓病が発生する最低限度を超過したのはわずかであった。(684)
- ・ 農業労働者のうちでは、最も豊かなイングランドが最も栄養が悪かった。(685)  
「農業労働者のうちで栄養不良になったのはおもに女と子供だった。」(685)
- ・ ドクター・サイモン——「栄養不足が衛生上の重大問題になるよりもずっと前から、……家の暮らしはすべての物質的な慰安をまったく奪われているであろう。」(686)

S.687-693 住居の状態、蓄積と人口流入

○住居の状態

- ・ 「資本主義的蓄積が急速であればあるほど、労働者の住居の状態はますますみじめになる。」(687)
- ・ 諸都市の「改良」は貧民をますます片隅に追いやる。(687)  
「住宅の高価はその質に反比例する。」(687)

○ロンドンの状況

- ・ 「ぎっしり詰まった住宅、あるいはまたとうてい人間の住まいとは考えられない住宅という点では、ロンドンが第一位を占めている」(688)
- ・ 19cはじめには、イングランドには人口10万を超える都市はロンドンしかなかったが、今では人口5万を超える都市が28ある。(690)

○人口流入

- ・ 「ある工業都市または商業都市で資本が急速に蓄積されればされるほど、搾取される人間材料の流入はそれだけ急激であり」(690-691)
- ・ 「資本と労働があちこちに移動するために、一つの工業都市の住居状態は、今日ががまんのできるものでも明日はひどく悪いものになる。」(691)
- ・ 「明日はぼろぼろのアイランド人やおちぶれたイングランドの農業労働者がいなごの大群のようにはいつてくる。」(691)

■論点

- この節のような歴史的記述は、原理論ではどのように扱っていけばよいか。
- (679) 規模の問題はどのように扱えばよいか。
- 「事業部門」(682)、「事業家」(690)という用語について。

*Geschäftszweig.*